

あそ

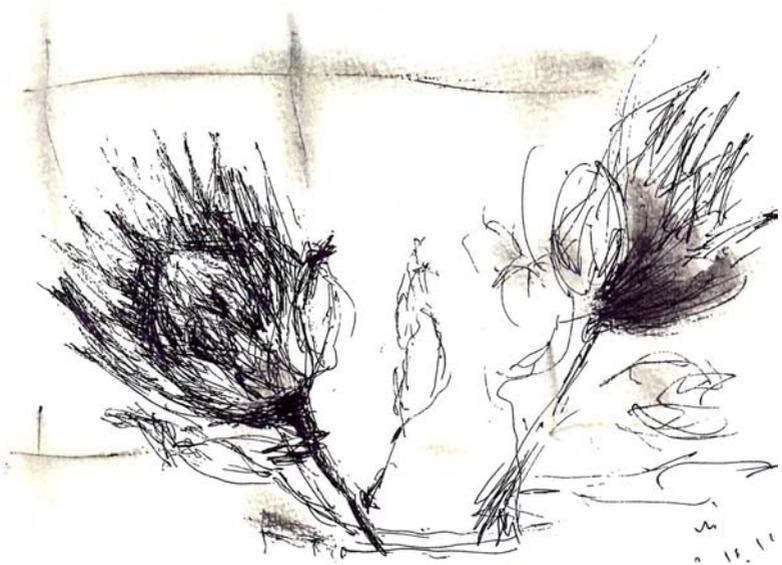
2

2008



あを

二 月



木守栉

中野 佐藤喜孝

をりとりて手のながくなるすゝきかな
基督に筋肉すこし木守栉
ぬるぬるはぬるぬるを生み十二月
炯々とまなこのありぬ寒玉子
焼鳥や小學生も疲れをり

漱石忌居ながらにして道後の湯
鮭半身とどきしあとにシクラメン
みのししのうしろは淋し十二月
年送る汽笛港の近ければ
喪の内のさりとて少し年用意

川崎 木村茂登子

着膨れや五感は遠くなり
にけり口紅のにじむ立体
マスクかな鉛筆の2Bが
好き冬ごもる帝劇に白
いリムジンクリスマス
マス雌猫はやさしく咬
まれ冬の月

銀座
篠田純子

吾輩と言ひたさうなり
炬燵猫クリスマススイヴ
満月のいとほしく日捲
りや生を惜しみて枇杷
の花たたら踏み尻餅を
つく十二月濃く薄き紅
葉の中の緑かな

千駄木
芝尚子

山里に生きて米寿の寒の水
あの日から生きて今年の師走かな
失言を引き摺りながら寒の夜
いつの世も抗しきれぬもの冬深む
来年へうれひのこして年暮れる

中野 芝宮須磨子

堀ぬちに柚子の金色見えて過ぐ
長湯せり時雨が軒端つたふ夜
ひとりゐてつくづくひとり狐啼く
流木に瘤があるので雪催
点すべく紐をてさぐる開戦日

輪島 定梶じょう

山歩きながら十二月八日暮れ
一夜にてコスモスすべて霜枯るる
赤信号冬満月を仰ぎたり
ベランダに富士見ゆる日や干大根
自転車の泥を落して小晦日

所沢 須賀敏子

萩細工干支を作りし好々爺
冬寺の鐘を打つたび影消えし
年の暮木魚は高音つづくなり
友からのメールひさびさ冬満月
装丁の朱も色あせ漱石忌

中野 鈴木多枝子

七五三エレベーターの真ん中に
あかんぼのゆび手袋に充滿す
窓ごとに秋の顔ある遊覧船
屋上の十字架スを映し水の秋
茶が咲いておほかたは順繰りとなる

浦和 竹内弘子

冬の暮

七竈雲ちぎれとぶ赤城山
耳遠き大工と話す枇杷の花
佗助や父の重たき黒鞆
かへる道みな別別に冬の暮
ナンにジャムたつぷりつけて聖夜なる

田端 田中藤穂

冬 紅葉

白金 東 亜 未

おひさまのさしはじめたるもみぢかな
寄道は楽し無駄また冬至風呂
落葉掃坊主頭の竹箒
からつぽの心と連れ立つ冬の旅
飛行機の小窓数多や冬の星

蓑虫や日の目見るまで揺れてゐる
親しげに昼の窓辺に冬の蝶
風弱し昨日に続き蒲団干す
茶梅さざんかのしぐるる日なり足痛む
耳元に小春日の蚊のまとひつく

四日市 長崎 桂子

名古屋 西本春水

山高し水澄む国の川下り
松茸の料理に箸が進みけり
張翰の恋ひし鱸に舌鼓
集安高句麗將軍塚
東洋のピラミッド立つ秋の原
好太王碑
石一つ立ち尽くしたる秋の原

番 傘

現役や悴みし掌をポケットに
冬帽子目深に被り最晩年
番傘を差したくなくて雪の坂
紀元節銃後真白き割烹着
餃子喰べて早く逝くべし温め酒

新宿 堀内一郎

新宿 森山のりこ

流星を観んとて一人着ぶくれる
オカリナの音冴え冴えと冬銀河
満月と重なる聖夜第九聞く
又消ゆる古き豆腐屋街師走
眼裏に墨絵の如き冬の霧

中野 森 理和

軽やかに足並揃へ賀状出す
冬田ひらけ駅弁の紐解き始む
年の瀬や二人つきりの二人の用
さながらに結界のごと蓮黄葉
蓮の実の出て累々と髑髏

少年と笑みを交せり冬日向
凍道や窓辺の猫に威嚇さる
水仙花受験の子等の長き列
陽をまとひ赤き冬芽の出揃ひぬ
未枯れし庭にひとえだ草珊瑚

見沼 山莊慶子

まんなか

湯中りす春の蝶々がこの冬に
銀杏落つ朝日と夕日のまんなかで
蜘蛛の巣や銀杏蓮散紅葉
十三夜鴉のこゑのとぎれとぎれ
雨雲の先に雨雲かへり花

中野 吉弘恭子

鹿手袋

渡邊友七

まなじりを拭く癖のつき年つまる
雀来ぬ日のつづきをり切山椒
薄茶一服ふかぶか花野の息を吸ふ
霜月や胴を寄せ合ひ船眠る
すがれ萩別れの辞尼に残す

清瀬

赤座典子

新顔の野の良猫らの堂々漱石忌
植木屋の手土産太き白菜漬く
飛石に雨染渡る暮の冬
小晦日人工芝に電跳ねる
賀状書く共通の友偲びつつ

桜ヶ丘
安部里子

小春日や生きてるだけで當りくじ
木枯の吹き飛ばしたか鬱消える
冬の旅座敷わらしに会へるかも
喜寿といふ実感のなし年用意
日向ぼこ熟睡中のここはどこ

向島
遠藤
実

紅葉なす木々の織りなす浄土かな
錠剤を数へ二月の日をかぞへ
撥ね強き梅の一枝に蕾見ゆ
製鉄所溢れしめたる冬の錆
星あまた刃物の匂ひの落椿

右ひだり覗いて歩く寒牡丹
凍蝶の氣息わづかに羽動く
冬天の月は鋭くみどりいろ
冬旱ここ一番の士の白
厨棚定座ときめしかじけ猫



逗子 鎌倉喜久恵

一月作品より

田中藤穂・佐藤喜孝

さを鹿の次はわたくし山の水

佐藤喜孝

山歩きで渴いたのどをうるおそうと思つて、
山水の湧く場所へ近づいてゆくと、雄鹿の先客
が居て水を飲んでゐる。それでこの作者はそつ
と足を止めて、鹿が充分に飲み終つて去るのを
静かに待っているのである。その優しい澄んだ
心境が読むものに快い。

この句、はさらりと詠んでいるように見える
が、さを鹿などという優雅な古語を用い、わた
くしと平仮名を使つて謙虚さや時間を漂わせ、
読者は知らず知らずのうちに、作者の至芸の中
に連れてゆかれてしまふ。

冬の蠅老猫の背を好みをり

鎌倉喜久恵

喜久恵さんの作句姿勢はいつも誠実で緻密で
ある。外連味などは微塵もない。なのにそれが

何とも云えないお可笑しみを引き出すことがある。この句もその一つである。生き残りの冬の蠅は暖かいものを求めて老猫の背にとまった。若く元気な猫よりも、こちらもややくたびれた老猫の背は毛も柔く居心地がよさそう。でも老猫も時々ぶるつと身を振らせて蠅を追払う。けれど蠅はまた同じところへ下りてきてとまる。それを見ていた作者は、老猫の背を好みをりと決めたのだ。三者ともに大真面目なのが何とも愉快なのです。

冬の鏡人につれなくして鬱に

木村茂登子

冬の鏡、が自己嫌悪の気持ちを表すのに上手く使われてゐる。つれなくしたと云つても相手の要求が無理だったのかも知れないし、自分の心の在り所がたまたま不安定で、ついそうなつてしまうこともあります。反省しつつつ朗らか

に暮しましょう。複雑な内容をうまく一句になさったと思います。

ピラカンサきのふの夜のヒステリー 篠田純子

ヒステリーを起こすのは心身に活力あればこそで、羨ましい。ピラカンサはあまり美味しくないのでしょうか。小鳥達にも食べられずに何時までも枝にびっしり残っているのをよく見かけます。黄色・オレンジ色・紅色ですが艶やかであまり毒々しい感じはしません。

夜のヒステリーに配したのがピラカンサであつたのが救われました。

黄落やフランスパンのならぶ籠 芝 尚子

田園調布の駅が今のように改築される前は、古い小さな可愛い駅舎で、前に広場があり、そこに石造りの古い半円形のベンチがあつて小さな池に金魚や鯉が泳いでいました。

広場から放射状に何本か道があり、公孫樹並木になつていて、秋それが黄葉するときの見事

さ、黄落ともなれば道までが真つ黄色になつて息を呑む光景です。広場に面してパン屋さんがあつて、いろいろなパンが並んでいて、私はこの句を見た時、そんなもろもろの記憶が一気に甦つてしまつたのです。

尚子さんは「私は何処へ行つても最高齢」などと仰りながら、こんな洒落た句を作つて人を驚かします。他の句も滋味あり俳味ありのよい句が並んでいて感服します。

冬の虫別れはうしろ振り向かず 鈴木多枝子

芭蕉の時代の風習では、長旅に出る人の送別は、一駅先の駅まで同行する。別れるときは後姿が見えなくなるまで見送る。送られる者は後を振り返つてはいけなさとされていたそうです。振り返つたら互いに心が堪えられなくなるからでしょう。鳴いていた虫も殆ど居なくなつて、僅かに生き残っている冬の虫、この句は、胸が痛むような淋しい句です。

代々の牛馬を埋めし蒔田の辺

竹内弘子

農耕のために使役した牛や馬が一生を終えて死んだ時、どうするのかということ、今まで考えたこともなかったが、田の一隅にそういう馬や牛を埋める場所があつて、弘子さんは先日幸手で土地の方の案内でそれを見てこられたそうである。昔からの農家ならば何代にもわたつて牛馬と共に暮してきたのだから、そこに埋めた牛馬も代々のものになるわけである。そこには作物は作らないで、今は他の農地より少し凹んでいるそうである。最近牛馬は機械にとつて代わられて、今後はもう、そこへ埋められるものはないかも知れないが、私達の先祖の生きてきた歳月がぐつと迫つてくる気がして、強く印象に残る一句でした。(以上・田中藤穂)

塵穴の松葉に照葉二三枚

東 亜 未

「塵穴」は初見。「茶庭内に作る四角または円

形の穴。入口近くに作られた装飾的はぎだめ。」と広辞苑で知った。そのチリアナに松葉と紅葉した葉を二三枚入れてある。茶人には常識的なことであらうが、見たことのない私は、興味が湧く。「覗き石といわれる小さな自然石を添え、青竹の塵箬をたてかけておく」ことも知った。興味の対象を簡潔・的確に捕まへてゐる。

咳込んで今果てるかと思ひたり

長崎桂子

「咳込む」時は呼吸も困難になる。死ぬかと思ふ苦しいときもある。家人にも喘息持ちがゐて喉を拡張する薬を持歩いてゐる。周りに家族がゐれば心配も少しは和らぐのであらうが、ひとり暮しの人は不安も倍加することだらう。「今果てるか」とは大仰に見えるが、作者にはまことのおもひである。

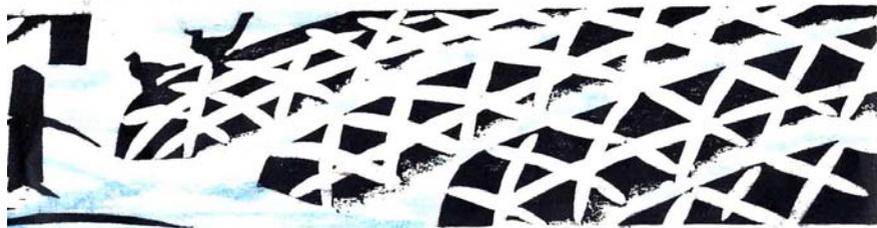
庭園のくまなく小春日和かな

安部里子

風もなくうらうらとした庭園、「くまなく」が大らかな句柄にした。(以上・佐藤喜孝)

さを鹿の次はわたくし山の水
冬の蠅老猫の背を好みをり
雪吊に松はんなりと納まりぬ
ピラカンサきのふの夜のヒステリー
泣く男泣かない女近松忌
政三疎みして冬に入る
手相見に危ふき冬の虹かかる
ふるさとを持つ隣人の柿すだれ
冬の虫別れはうしろ振り向かず
さくら堤とほく薄ももいろに枯る
物のなき頃の懐かしあけびの実
塵穴の松葉に照葉二三枚

佐藤喜孝
鎌倉喜久恵
木村茂登子
篠田純子
芝尚子
芝宮須磨子
定梶じょう
須賀敏子
鈴木多枝子
竹内弘子
田中藤穂
東亜未



前月作品

咳込んで今果てるかと思ひたり	懐かしき故里の山澄み渡る	手に触れる湧水ぬくし石露の花	二人ゐて一人の如し餅を焼く	御開帳観音やさし紅葉寺	大屋根に鳥の死骸昼の月	秋うらら反りて屈みて鍛へをり	初空に鳥の羽の舞ふ時刻	笹鳴の奥は縞なす日矢すだれ	おむすびの新海苔の香も夜行バス	庭園のくまなく小春日和かな	隅田川桜紅葉を流しけり
長崎桂子	西本春水	早崎泰江	堀内一郎	森山のりこ	森理和	山莊慶子	吉弘恭子	渡邊友七	赤座典子	安部里子	遠藤実

喜孝 抄





私が生をうけたのは七十八年前、福島県の三春町の在である。この三春町は名の如く桜・梅・桃と花が同時に咲くと言うことからついた名前と聞いた。この町から四キロほど離れた芦沢村という寒村で生まれた。

生家から千メートル位の所に二百ほど階段をのぼると桜に囲まれた小学校があり、三百年は過ぎたであろうポプラの木、その側に毎日最敬礼をした宝安殿があった。まだ藁葺の校舎で走って入ったものである。ポプラの木は皮を削って好きな子の名を書いて卒業したのを思い出す。

父は私が熱があっても登校させ、早退を先生に告げ背負って帰った。六年間無欠席であった。

私が一年の時の担任の先生は若き女性の小林先生であった。毎日残りの肝油

を口に入れてくれ、頬を軽くたたいて笑ってくれた。子供の頃のことであるが今でも忘れることのできぬものである。甘えん坊だったらしい。三春町は山につつまれた静かな町であった。

あの頃の農家は貧しかった。三春の町に天神様があり黒い等身大の牛が坐っていた。小学校の進級や卒業の時に感謝と今後を祈りに六・七名位で行き、帰りに支那そばを食べることがどんなに嬉しかったかいまだに最高の味として残っている。又三春に白山神社があり白い馬が等身大で社殿に治まっていた。二百三高地の戦の時に両社の牛と馬も立ち上がったて声を天地に放ったと聞く。乃木將軍の生き方については感慨無量である。天国の魂に冥福を祈るのみ。話が別の方になってしまったが三春の裏側に川が流れている、その源流は三春滝桜の根本のせせらぎを本流としている。その川の水を利用して馬場の湯があり現在は温泉宿として立派に営業している。三春町にしばらくぶりに帰ったが驚くほど綺麗になっていた。これこそ三春滝桜の御蔭であろう。古里も変わったものである。若い人達は言葉まで変わり、昔と違い田舎弁はあまり聞けなくなつた。東京に出るときは必ず成功して郷に帰り暮らすことを山河に誓つたものであるが、子供も産まれ友人もでき結局は他郷に埋骨されるものらしい。寂しいことである。私も郷愁の念がうすれてきている。

あと二ヶ月終戦が遅れば十月に入隊していただろう。八月の終戦で少年航

空兵は夢になつてしまった。敗れるなどと夢想だにしなかった。泣き崩れ三日は寝込んだ。悔しかった、でも里に残っているわけにはゆくまい、東京に出ることを心に決めて父に話をした。父は黙っていた。一三日過ぎた頃人の生き方、又学問を知れと金を渡してくれた。村長の父はそのまま役場に行ったが心は揺れていたろう。私の苦悶も消え父の心に感謝もしたのである。昭和二十二年に上京、卒業後、女子高等学校で教鞭をとっていたが、都合で現在の仕事を始めた。商品の良し悪しも知らず苦勞の連続であつた。そういうとき励ましていただいたのはお得意様で恐縮の至りであつた。しかし教壇に立ち子供を相手にしていた。方が良かったと思うこともあつた。

今度しばらくぶりで三春に帰つた。それは私の子供の頃を知りたかつたのである。

私の兄弟は八人である。そのうち残つているのは三人の姉と妹である。姉が学校に行くと上京の折り（戦前である）、いつも面倒を見てくれていたので泣きながら見送り姉も泣いていたのをはつきり覚えている。

私は母に抱かれて一緒に寝て乳を飲まれたことも覚えていない。常日頃私のそばには祖母が居て寂しげに祖母に抱かれ祖母のでない乳首を吸つて寝たことは覚えている。祖母が居ないと一日は終らなかつたのである。でも母の

を詠まされ指導されるのも無理もないことで、感心されたり笑われたりしたものである。伯父の俳句を始めたのは職場に俳句をやるかと職員の賛同者が多く、田中午次郎さんが代表、伯父は同人会長として出発したようである。日華事変が勃発した為陸軍工庁に勤務していた関係で渡満してその間句作から遠ざかったようである。二十一年終戦で帰還、田中午次郎は鴨に復帰したようである。又私も上京していたので伯父に連れられていったのか鴨で会った田中さんは大男であった。石橋辰之助さんが去ったので石田波郷を師事することを決め石橋辰之助・田中午次郎・火竿・石塚友二・志摩芳次郎と一緒に同人として参加したらしい。これは戦前であるが戦後も同人は変わってはいなかったようである。

戦後伯父と一緒に二ヶ所の句会に時々行っていたのである。若かった私には、俳界の事など何も知らない。今考えると俳人として有名な人たちであったことを心より感動し思い出して書いているのである。懐かしいものである。

その内に波郷が胸を患い余り句会に出ず鶴も淋しくなっていく、又角川源義さんが河の発行人として種々問題があったようだが。源義さんは「川」にしようとするのを川は流れてしまうから「河」と言う案も出てきた。西東三鬼や伯父等の反対で「河」となったようである。

あの頃は俳人は同志や主宰でなくとも付合っていたようである。高島茂さん

の店「ぼるが」にもよく利用したらしい。

「河」創刊までには伯父も西東三鬼さんも大分苦労したようである。私は西東三鬼さんの句会には出席していなかったのであるが、河のことでよく三春屋に伯父と相談に来て洋服を買って帰っていったときも払いに来る先生と呼ぶ人の中では私とも付合わされた人である。私を連れて食事を時々ともにしたものである。笑いの絶えない甘えられる人であった。奥さんも良き人であった。まづ師とした人は渡辺七三郎・石田波郷・角川源樹・竹内弘子・高島茂・佐藤喜孝。西東三鬼さんは師ではないけれども俳句を見てくれ教えて貰った。

竹内弘子さんには感謝しきれぬ。今俳句を詠んでいるのも高島茂先生のところに連れられて俳句を進められ、入会しようと決めたのである。現代の俳句はどうしても詠めずにいるが、そのまま変えることなく終ろうと思っている。

いまになると師と呼ぶ人又知人の多くは天国である。私も間近であるがその時まで捨てることなく優しく指導して下さい。この地から私の我儘を許して貰いながら「あを」に投句していること報告して天国の師の冥福を祈りながら俳句を続けて六十年よくも続いたものである。多くの人を偲びながら筆を置く。

近世俳諧と漢詩文 二四

王岩

採蓮曲

手折る手の蓮より白し池の面 買山

採蓮曲は樂府題で、「蓮」とは発音が「憐（愛おしく思う）」に通じる掛詞で、多くは男女相思の情感が歌われる。その曲は漢代の採蓮のことを賦する江南曲に基づいていると言われる。梁の武帝・昭明太子に詩作があり、その後、簡文帝を始め、陳の後主・唐の李白・賀知章・白居易などが擬して作っている。例えば、李白に

若耶溪傍採蓮女、 若耶溪の傍 蓮採る女

笑隔荷花共人語、 笑って荷の花を隔てつつ 人と共に語る

日照新粧水底明、日は新しき粧ひを照らして 水底に明らかに

風飄香袖空中挙、風は香ぐはしき袖を飄して 空中に挙がる

……

という「採蓮曲」があり、十九世紀にフランスのエルベ・サン・ドニによってヨーロッパに紹介された。その後ドイツのグスタフ・マーラーによって交響曲「大地の歌」に組み入れられた。「若耶溪」とは、浙江省紹興の南にある名勝、むかし越の美人西施が紗を洗ったという古跡である。その河で今も乙女たちが舟を浮かべて蓮の実を採っている。大きな荷の花に遮られて、彼女たちの姿は見えないものの、笑いながら話している声が聞こえる。やがて彼女たちの姿が現れると、太陽は美しく化粧した彼女たちの人影を水面に映し出す。薫風は乙女たちの袖を吹き上げ、芳ばしい香りを一面に漂わせていく……蓮を採る乙女たちの群像である。

李白はまた「越女詞」という五絶を詠んだ。

耶溪採蓮女、耶溪にて蓮を採る女

見客棹歌回、客を見ては棹歌しつつ回る

笑入荷花去、笑って荷の花に入りて去り

佯羞不肯来、佯り羞じて肯えて来たらず

耶溪とは若耶溪の略で、舟歌を歌いながら蓮の実を採っている、たおやかな乙女が見知らぬ旅人に会い、恥じらって大きな蓮花の裏に隠れてしまった。二十文字で仕立てられた一幅の絵巻物。

買山、生没年未詳。江戸時代後期の俳人。別号に久花堂・買山があり、在原氏を称す。蕪村・几董の門人。著作には『呉竹集』『春の画合』『道草集』などがある。問題の句は『俳諧水餅集』（二柳編）に見える買山の連作「発句四季」、

美しい形で蛇喰ふきゞす哉

採蓮曲

手折る手の蓮より白し池の面

露なめてけふさを鹿の初音哉

雪中行舟

興尽て猪牙で帰るや雪の旦

の第二句である。

「採蓮曲」という楽府題の中に内包された美意識を取り入れて、買山はユニークな視点から蓮を採る美人を具象することに成功した。蓮の花よりも白い、たおやかに撓う双手しか捉えないという描写は、かえって美人の全体像を眼前に迫らせるほど生き生きとしている。

池の面に映る美人の倒影は眩しいほど艶めいている。詩仙李白の「採蓮曲」に優るとも劣らない句作だと言えよう。



許六



成美



暁台

買山の作品のアンソロジーがで
きませんでしたので「俳句俳文
集」（日本名著全集刊行会）
より似顔絵を転載しました。

あをかき集

立冬
茶の花
次

堀内一郎 選 (六人目以降五十音順)

秒針はいらぬ余生やお茶の花 遠藤 実
秣食む曲家暗く冬来る
定年のほしき手仕事お茶の花
さそり座の大きく見えて冬来る
ポーターに徹する夫やお茶の花
はぐれたる旅人のごと冬来る
戦中派亡き友とみた茶の花や 安部里子

遠藤 実

時間にとらわれない余生、解放感とその静寂に過去が甦る。定年の空白を紛らす手仕事とは、魂を奪われた淋しさであろう。冬も旅人、緊張と厳しさを地上を彷徨い続ける。

安部里子

戦中派は徐々に少なくなる。茶の花で地味な当時の明け暮れを彷彿させる。どん底掘れば、は開き直りと思う。悪性の風邪が流行、猫が変とご多分に洩れず。それでも猫は外出。

木村茂登子

カラスのカアと嘯くが、それだけ立派な冬構えである。原油高とかけつけたが、他にも諸々事情はあるらしい。景気のせい、体のせいかも。七五三の

茶の花の親しき中の礼儀あり
立冬のくしゃみ連発うわさきく
立冬のどん底掘れば抜けるかな
立冬の往診頼む猫が変
星月夜次の番かも迎へ待つ
立冬の朝のト声カラスのカア
立冬と思へばの空・水の色
立冬や湯の加減良き貰ひ風呂
水琴窟の遠いひびきも冬立つ日
原油高二次会なしの忘年会
七五三長男次男長女の順
茶の花や嬉しき噂次々と
茶の花や屈みて聞きぬ花の声
遠目にもなほ点々とお茶の花
野仏に立冬の陽の柔らかし
立冬や北の友より長電話

木村茂登子

森山のりこ

幸福感で締めくくる。一連では逸品である。

森山のりこ

嬉しい噂。嫌なことの多いこの頃次々と打ち消しているようだ。読者を安心させるように茶の花のしつとり感と相俟つてほのかである。車軸の軋みは手堅くオーソドックスだが残る作品と思う。

鎌倉喜久恵

赤い頭巾も一夏で白っぽくなる。うちでも偶に替えるが秋には見る影もない。
いつか見た塩山奥の部落では始めから白を被せている。住民の知恵である。

行商の媪可愛そうだが逞しい生き様。

経堂の車軸の軋み冬は来ぬ
冬立ちぬ頭巾の褪せし六地藏
鎌倉喜久恵

丸木橋朽ちてそのまま冬に入る
茶の花のこぼるる土は黒ぐると
茶の花はかはたれときに白く浮く
考へる次の一手に懐手
行商の媪次つぎ襟たてて
富士眺む湯治の母の冬立つ日
赤座典子

小走りにポストにむかふ今朝の冬
茶の花や俯けるまま弾けをり
弥次郎兵衛の一日終りぬ室の花
痛ましき事件次ぎ次ぎ神の留守
今はもう使はぬ火の見町は冬
定梶じょう

佃島橋を渡って冬に入る
冬九旬始まる机上なにも置かず
冬に入る動かぬものに川の杭

赤座典子

富士を見て得がたい風景。湯治で母の慎しさも感じられ良い親孝行である。痛ましい事件が毎日のように報道されて憂鬱、その人達には神はいない。

定梶じょう

地方に火の見櫓が残っている。使う使わぬは不明だが立っているだけで頼りになる。半鐘を鳴らして心を一つにする大事なことが近代化で疎かになってきた。

篠田純子

「心ひもじき」、精神的なものにご執心。松の事は松に花の事は花にご立派である。

萬福寺格調もよろしく悟りもそれとなく。旺盛な力強さ読者もお零れ頂戴。

冬暁の窯よつぎつぎ麴誕生
茶の花や心ひもじき日は学ぶ
篠田純子

三男と次女の夫婦の温め酒
鷹揚な大黒の笑み茶の木咲く
茶の花や宇治黄葉山萬福寺
生命力気力体力冬来たる

芝宮須磨子

立冬や先に逝くなと友が言ふ
立冬や日差し背に受け折紙を
誰が植えたか歩道の脇にお茶の花
お茶の花白に黄のしべ嫺やかに
次ぎ次ぎに折りつぐ手先冬日和
茶の花の垣根の道を選びけり
芝 尚子

池の辺の茶の花密と夕明り
茶の花の香りひそやか寺の町
立冬やわが身を覚悟猫を抱く
立冬や今年も日記白いまま

芝宮須磨子

同齡のよしみ有難くも淋しい励まし、
神のみぞ知る。折り紙の冬、幸せ何よ
りである。冬日和が作者を代弁して命
の強かさも見せている。

芝 尚子

垣根の道、日常のしがらみから抜け
たい思いは誰でもあり年輪を重ねると
静けさが良い。「の」三個、となりにも
あるが一歩一歩への決意にとれる。

須賀敏子

五十三次は来し方であり石路日和は
命の灯と見る。私はそう思える。散歩道、
三十年は身辺を語り安泰を知らず。
カラオケの余裕なせ憎らしい。

東海道五十三次石落日和 須賀敏子

茶の花の咲ぎ始めたる散歩道
茶の花や新居は既に三十年
二次会はカラオケに寄る十二月
牛乳の届きし音や今朝の冬
立冬の小革も深き影で落す

鈴木多枝子

冬立つやほら貝ひびき神の森
冬立つやほの暖かき水道水
忘れたきことの多さよお茶の花
紅茶には塩ひとつまみ冬に入る
立冬や歯ごたえのある手打蕎麦

田中藤穂

街道の軒低き家冬に入る
立冬の出湯溢るるお茶の花
湯河原は水音の町茶の花
次々と皿運ばるる紅葉宿
立冬やおれおれ詐欺の電話らし

東 亜 未

鈴木多枝子

忘れたきこと、吉は少ないのが常で
割合は良いことは四、凶が五つとされ
る。

塩ひとつまみ、冬の厳しさに立ち向
かう潔さも窺える。或はお呪い。

田中藤穂

歯ごたえ（噛み締め）冬に入る姿勢
である。街道の軒低き家並みで親しさ
やすらぎがある。湯河原は夜になると
水音に変わる。鄙びた湯治場懐かしい
昔。

東 亜 未

おれおれ詐欺随分問題になった。電
話に疑いの耳、現に後を絶たないが心
得ていて茶化す。さりげなく腹召さる

立冬やザクザク庭を踏み歩く
立冬や一年を経し犬の墓
茶の花や千利休は腹召さる
次づぎと取出すおもちゃ鮫鱈鍋
立冬や急に身震ひ起こる朝
立冬や縫糸とほす難儀かな
立冬の山はうとうと始めたり
次次と不正出て来るこころ寒
次ですよ研修生笑み冬医院
立冬やシンビジウムに花芽見ゆ
山なみの次第に消ゆる冬茜
街灯の次ぎ次ぎともる冬の夕
茶の花をのぞくがごとくしじみ蝶
茶の花の香りてあたりほのぼのと
立冬やトラック三台畦道に
立冬や井戸水使ふ豆腐屋さん

長崎桂子

早崎泰江

森 理和

とするアンバランスの怪は見事。最近
無い傑作。

長崎桂子

「難儀かな」、わざわざ「かな」と気
張ることは無い。「難しさ」で十分。う
とうとで山眠る罪は無い。触れるもの
もとうとうと。

町医者であろうか、一寸と不信感も。

早崎泰江

冬茜、寒くなれば愈々鮮烈に感じる。
人は間際の紅さ果敢なさに憧れる。
生命のはかなさも重なるのであろう。
茶の花に蝶を覗かせない方が無難。

森 理和

トラック三台の断定は納得させるエ

立冬や玄関先に猫坐る
靴揃へ送り出す日々お茶の花
早送り五十三次冬紅葉
立冬や辞書から拾ふ異体文字

吉弘恭子

立冬や一休和尚に笑はされ
お茶の花筵の客に天こ盛り
立冬の朝日にひかる野良猫の目
すれ違ふ赤子に笑み笑みお茶の花
還らざる水の音して立冬の日
立冬や雀へきあふ稲かぶら
立冬の日わが屈伸の尺蠖めく
立冬や水澄む無音漲れり
次の日も今日も悲しや落葉降る
立冬や猫鳥人の歩きぬる
アワダチサウばかりで泣ける時次郎
次もつぎも日向ぼこりの動物園

佐藤喜孝

渡邊友七

ネルギーを持つ。この強引さが思わぬ
ものを生むきつかけとなるようだ。そ
の反面靴揃へと慎しくお茶の花になっ
ている。

吉弘恭子

一休和尚難しいが立冬と交叉して和
ませている。天こ盛り、笑み笑み、ね
この目もふんだんな愛情サービス精
神。

渡邊友七

帰らざる水の音、人生を思う。尺蠖
めくは尺蠖虫と突き放しても良いと思
う。「へきあふえねかぶら」郷土から
生れ出た声は率直で尊い。自嘲して前
進する。

立冬やユーレイに似て中核派
自転車を茶の花垣に倒し置く
次の間に掘炬燵ある同期会
立冬や昨日の水は動かさず
南無阿弥陀七度び唱えてお茶の花
永いながい冬眠か次ぎつぎに

堀内一郎

竹内弘子



あを吟行会のお知らせ

吟行地 佐島（三浦半島）

日 時 3月16日（日）午前11時

集合場所 「逗子」駅

詳細は後日申込者に連絡します。

申込み〆切 3月12日（水）

申込先 佐藤喜孝 090 9828 4244

王岩さんの「近世俳諧と漢詩文」は古俳諧を新しい視点で読み解くたのしい読物となつてゐる。その回の俳人の作品を少々まとめて紹介してゐる。まとめてゐる内にひとりで古俳諧が身近になつてくる気がしてきた。私は総合誌の付録についてくる俳句手帳に思ひついた句を書きとめてゐる。今使つてゐる『NHK俳句』の俳句手帳に掲句を見つけた。

日の射さない藪の奥に残つてゐる雪を見つけた。その雪を「なまくと」とらへた。小学館の国語大辞典をひもとくとなまなまとは「いかにもなまなましいさまをあらわす語。新鮮である。」とある。引用文に「なまなまと枝もがれたる柘榴かな 飯田蛇笏」が載つていたが、この句は

なまくと雪残りけり藪の奥

加藤暁台 『NHK俳句・俳句手帳』より 佐藤喜孝

載つてゐなかつた。編者が暁台の句を識つていたなら引用されてゐたと思ふ句格である。あたりはもう融けて雪は見当らない。雪に対して使うことはないと思はれる「なまくと」が、日も当らない藪奥の残り雪の、色と質感を捉へ、あたりのくらみそめた中に雪が白々と浮んでゐる。無機質なはずの雪があたりかもし生あるがごとく息づいて見える。ものすがたを捉へるのは理ではなく鋭い、やはらかい感受性、そして天恵の力がなければ得られぬ境地と思ふ。

十二月の句会

傳 中野区 カフェ傳

墓地統ぶる金の塊大公孫樹

藤 穂

しづふではやつてられない雪をんな

純 子

我輩と言ひさうな猫炬燵かな

尚 子

わはわはと初雪おりて消ゆるかな

恭 子

水かけて墓あたらしき青木の美

弘 子

ナンにジャムたつぷりつけて聖夜なる

藤 穂

湯中りか春の蝶々がこの冬に

恭 子

芙蓉の美切符売場の古き家

喜 孝

息白し少女反り身に矢を放つ

敦 子

七 座

夏 子

戸を落す如くに暮れて冬灯

喜久恵

中野区 小川苑

木 枯

着膨れて時代小説さきするめ

典 子

道々の寂しさしらね冬の暮

大 佳

着膨れて五感の遠くなりけり

純 子

炭酸の泡がはじける時雨かな

恭 子

牛塚の時経て凹む冬野かな

喜 孝

生命線を横切る輝のできた朝

藤 穂

函館の古き友から鮭半身

茂登子

かへる道みんな別々年の暮

多 枝子

瀬戸の鳥漁網戴き枯れ朝顔

理 和

ゆず湯して父の忌日の近くなり

純 子

夕映えのさくら色なり冬の幹

綾 子

一日中冬日の当たる猫の村

喜 孝

山歩きながら十二月八日暮れる

敏 子

焼鳥や小学生も疲れをり

東 亜未

あを林橋

白金台福祉会館

山里に生きて米寿の寒の水

須 磨子

連句勉強会 毎月第1日曜

中野坂上 佐藤喜孝

(090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜

カフェ傳 森 理和

(03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜

岸町公民館 竹内弘子

(0488-86-3501)

あを吟行会 三月第3日曜

佐 島

佐藤喜孝 (090-9828-4244)

七座句会 毎月第4火曜

小川苑 吉弘恭子

(090-9839-3943)



初心者を中心に「あを林檎」の会が発展解消することになった。この句会は他の句会と違ふところがあり楽しみであった。一つは作者の作品に至る経過を聞き、作者の意図に添った句にする表現を考へることにした。句会では御法度の自句自解を可としたのである。ひとつは「実践俳句教室」と自称してゐたので、何回か俳句の作り方を分りやすく(?)話したつもり。参考になつたのか不安だがしやべつた本人は勉強になつた。もうひとつは俳句を読む癖をつけて貰ふために他人の句を一句出句するといふことにした。誰の句であるか分らないうちに感想を述べあふので褒めてゐるときは問題ないが、添削などをしたあとに有名作家の作品と分つたときの狼狽ぶりは推して知るべし。十二月の句会でどこかで見た感じのする句が出句された。蓋を開けたら拙著『青寫眞』の中の一句であつた。汗顔の至りではあるが自句とは思はなかつた。この句会の楽しい思ひ出になつてしまつた。

「あを林檎」はしばらく吟行会としてつづけてゆくが、機会を得て再会してみたいと思つてゐる。

表紙は昨年二月「旧芝離宮恩賜庭園」に遊んだ折、蛙合戦に行会つた。大半は黒い幕だが、一匹色の違ふのが目立つてゐた。池の中央から押つ取り刀で杭を乗りこえてやつてくる奴もゐる。静かな緊迫感があつた。

御芳志多謝

東亜末 様

二〇〇八年二月号

発行日

二月十四日

発行所

東京都中野区中央2・50・3
電話 090・9828・4244

印刷・製本・レイアウト

佐藤喜孝 竹徳房
カット／恩田秋夫・松村美智子

郵便振替

会費 一〇〇〇〇円 (送料共)／一年
00130・655526 (あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。

「あを」入会ご希望の方は下記まで。

自選作品は5句（作品により添削あり）

「あをかき集」は7句投句。

普通会员 10,000（年間）

インターネット会員（冊子無し）

5,000

連絡先

satou.yositaka@rouge.plala.or.jp



Café 傳

中野区上高田 1-1-1

03-3368-4263